

らされていなかった。勉君との別れを明確に父親に知らせると共に、彼の死を確認してないことも話した。また私以外に、三村勉君との別れを知る人はないことも知らせた。以後一年、父親の願いにより三村勉君との別れの日を彼の命日とし、死亡届を役所に提出した。

後日新見より、三村君の告別式の通知を受け、新見まで彼の告別式に参列した。私は彼の死を見ることができず、死亡届を出し公報を出した。もしも勉君が帰ったら、元気で帰ったら喜んで彼を迎えるようお願いした。大変な告別式である。戦友の一人として参列した。墓地は駅の東にある丘であった。長い参列者が続いている。彼の冥福と家族の幸を心からお祈りする。戦後五十八年になってしまった。三村は帰らなかつた。別れた日の三村の影が今も昨日のように思い出される。

過酷な抑留生活

広島県 平野 正

一、北米合衆国加州ロングビーチ市において大正十(一九二二)年五月十五日出生。

広島県立工業学校卒業、南満州鉄道綏就職、高専修了。

家族は母と兄、弟は大学生及び旧中学生の五人構成。

二、昭和十七(一九四二)年一月、満州関東軍に入隊。虎頭国境守備隊第二地区隊勤務。

昭和二十年二月、日本国土防衛軍舞鶴一〇六二部隊に編成隊として牡丹江鏡泊湖において陣地構築中。

三、八月二十七日、ソ連軍侵攻。二十九日、武装解除。

四、終戦の詔勅はなし。休戦という状況で、関東軍社

丹江倉庫に收容される。現地人には関係なし。ソ連軍に時計、万年筆その他貴重品を奪い取られる。

五、徒歩の行軍により綏芬河に至り、ソ連領より貨車に乗りイマン鉄橋を渡る時、対岸の虎頭の陣地を見ながらハバロフスクに到着、時十月初旬。

六、ハバロフスク第一七收容所に千人単位で收容される。

七、将校は別途收容で、下士官、兵にて編成。私も平野ブリガード（班）として、作業小隊長として伐採組。だんだんと寒さに向かうのに夏服のまままで冬服はなし。毛布を被りながらシラミ取り。入浴はドラム缶。後に風呂。食事は馬糧。コウリヤンまたはフスマ等で栄養失調者が多発し、死亡者が続々と発生した。昭和二十二年作業場を変わるまでに約三割の死亡者。体調不良で入院も約三割と過酷な抑留生活。

その対策として、ソ連語を覚えて警戒兵及びマツセル（作業監督）と語り合うことが大切だ、特別警戒隊、ゲーベールウ及び收容所高官とも語り合い良き

環境をつくるべきだと思い、中国語で各兵士に当たる。ちょうど具合良く中国語の通ずる兵士がいた。

彼はハルビンにいたから満語が通じるので満語で話し、ソ連語の勉強を二カ月した。作業場マッセルとノルマのことで話をしていると、松の実（アレヒ）

が欲しい、麻袋一俵でブリガード（四分隊）の伐採をストーブプレゼント、一〇〇%とする約束で松の実取りを二分隊とした。森林奥地では松一本で二、三袋は取れる。奥地で伐採していると森林警備隊が来たので、ロシア語で警備隊の了解を取り安全に作業ができた。隣のマッセルにも話を持ちかけ、次々と話をして各作業小隊を一〇〇%以上とし、優秀作業（ハラシヨラポーター）として食糧は増えた。国家憲兵、ゲーベールウと話し合って、休日には收容所内の環境改善をし、今までなかった娯楽、運動設備及び消毒場を造りシラミも高温で退治した。洗濯も十分した。

八、一七收容所は旧ソ連の刑務所で、個室はなし、各種設備はなし、寂しい收容所であった。ソ連赤化教

育及び「日本新聞」の解説、教育もなく、ただ抑留者が将棋また囲碁を日常の娯楽として送日した。

九、二十一年秋ごろより食品の種類も多くなり、ソ連服の支給もされ、抑留生活も良くなった。

二十二年十月、今年度中に日本にダモイだということでもナホトカまで出たが、直ぐ道路埋設工事でも、ナホトカより一五キロくらい所の山を爆破し地ならしをする作業をした。テント生活で柵はなく自由行動で、二十三年一月まで作業した。またダモイでナホトカ収容所に入れられ、その年の第一船または第二船で帰国する予定とのことだった。収容所では民主化教育が始まったが、今まで教育を受けたことがないので政治部員（日本人）から大変な活を入れられた。作業（建物修理）から帰り食事が済むと直ぐ洗脳教育。夜間二時ごろまで毎日、ソ連赤国の国家構造、赤化思想及び布教方法、私的制裁と、全く過酷な収容所生活だった。

十、遂に帰還決定、二十三年五月六日発、第二船、永徳丸に乗船出発。日本航海水域に入って船内で日の

丸組と赤旗組が喧嘩となり、舞鶴上陸までに日の丸組一人、赤旗組七人が行方不明となった。舞鶴復員は五月九日だった。

帰還十日後、米軍日本駐留司令部より東京四谷の司令部へ出頭との通知があり、二世から各種の取調べがあった。待遇は非常に良かった。毎日取調べ時、タバコ、コーヒー、ケーキとお茶が出て、時間的に余裕があった一週間だった。

帰国当時、日本の企業は赤化思想者不採用と企業整備等で就職困難でしたが、県工出身者の先輩がいる企業が多く、私のような電気科出身者は中電力、中電工と容易に就職ができ、私は給料の多い中電工にいたしました。

その後全抑協に加入し、県理事と支部長の職をいただき、現在は抑留者皆様のために世話をさせていただきます。ただいております。

健康で至極元気です。

皆様の御健勝と御幸福をお祈りいたします。